

郷土博 通信

No.6

2015 秋



「珠裙」部分 (2頁・5頁参照)



CONTENTS

■ 珠裙	1	■ 郷土博物館のあゆみ (5)	11~13
■ 展示室紹介	2~4	■ 鎌田共済会の出版活動	14~17
■ 台湾サイシヤット族の珠裙	5~7	■ 張り子の虎絵付け体験講座を終えて	18
■ 宮武辰夫の蒐集と台湾原住民族	8~11	■ 第6回公開講座お知らせ	18



第1展示室

台湾原住民の民具—サイシヤット・タロコ・ヤミ(タオ)族の衣・食具を中心に

郷土博物館では、数量的に多くはありませんが大正末から昭和初期に寄贈された民族資料を所蔵しています。その中から、今回は「台湾原住民の民具」をテーマとして、台湾原住民の暮らしの用具をご紹介します。

台湾の原住民は17世紀頃漢民族が移住してくる前から台湾に住んでいた人々で、現在公式には16の民族が認められています。それぞれ、来住した時期やその経路については明確ではありませんが、言語以外にも物質文化、儀礼など多くの点で東南アジア、オセアニアの諸民族との類似性が指摘されています。

展示資料はサイシヤット族、タロコ族、ヤミ(タオ)族の衣・食具を中心としています。

その中でも、目を引くのはサイシヤット族の珠裙^{しゅくくん}(山田論文5頁参照)です。形の上からは腰布を連想しますが、本来は貨幣の役割を果たしていたものです。この珠裙は縞模様の長方形麻布に、糸に通した小粒の円柱状貝殻ビーズを縫い付けたもので、布の地模様を図柄の構成の基準としているようです。重さは1.3kgあり、これ1枚には約35,800個もの貝殻ビーズが使われています。また、模様を作っている貝殻ビーズを1連のものにすると、約61mの長さになります。財貨として取り扱う最小単位の1珠条の長さが2尺~2尺5寸と言われているので2尺とすると、だいたい、当珠裙1枚にビーズ100条が使用されたことになります。ここで使われている貝殻ビーズは完形品の大きなもので幅4mm、厚3.5mm、小さなもので幅2.5mm、厚1mm程ですが、その厚みは原材料である貝殻の切り取った部位によって左右されると思われます。

珠裙1枚を作り上げるのに要した労力の大きさが、その美しさの内にうかがえます。他にも、宮武辰夫氏(角南論文8頁参照)寄贈のヤミ(タオ)族の土器・土人形や木製の鞘の表裏に文様を彫りこんだ小刀、タロコ族の胴衣、籐製帽子など、興味深い資料を展示いたします。(廣瀬 永津子)



▲胴衣(袖なし上衣)

タロコ族／台湾花蓮県 身幅40.3 丈86.3cm



▲鉢(スープ用)

ヤミ(タオ)族／台湾蘭嶼(紅頭嶼)
口径22.1 高11.1cm

◀小刀

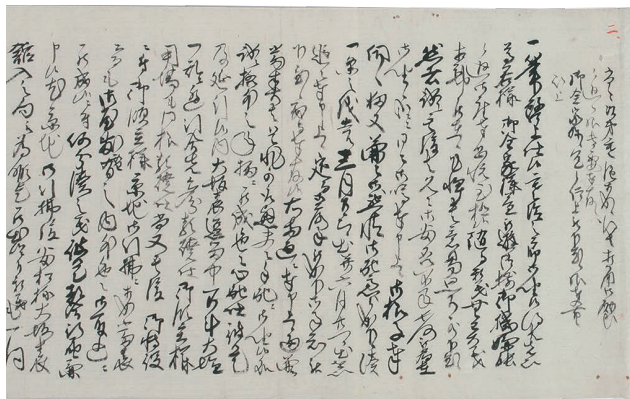
ヤミ(タオ)族／台湾蘭嶼(紅頭嶼)
長32.0 幅7.1 肩紐長96.5cm

第2展示室

久米通賢の今切湊改修計画と大塩平八郎の乱

久米栄左衛門通賢が、彼自身最大の事業といえる坂出塩田の開発を終えたのち、遠江国新居宿の今切湊（現静岡県湖西市新居町、浜名湖の南部、吉田藩領）について、天保7年（1836）10月に吉田藩から高松藩を通じて久米にその改修を計画するように命が下りました。久米は、同年11月に現地調査を行い、改修計画図なども作製します。

ところが、翌天保8年（1837）10月、現地での実質的な責任者である新居宿の中山屋和十郎は、久米宛書状①において、同年2月に大坂で起きた大塩平八郎の乱により、改修のための資金提供を約束していた豪商たちの屋敷や、吉田藩の「御用場」が焼失し、5月には吉田藩主・松平信順が京都所司代から老中への転任に伴って京都屋敷を引き払うなどの理由で、計画が進んでいないことを詫言っています。

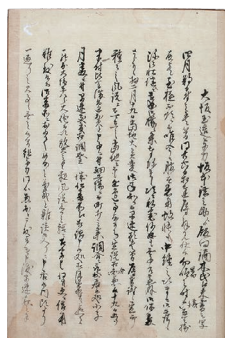


▲①中山屋和十郎書状（久米栄左衛門宛）の封筒と本紙冒頭

大塩平八郎の乱は、大坂東町奉行所の元与力で陽明学者の大塩が、日々の生活に困窮する大坂の人々を救うため、町奉行や豪商を誅伐しようと、門弟や近在の百姓らと徒党を組んで、大坂市中に放火・挙兵した事件ですが、蜂起した日の内に鎮圧されてしまいました。大塩は逃亡し、一ヶ月後に自殺します。幕府の体制を揺るがす大事件で、大坂市中の五分の一が焼失したともいわれ、3,300軒を超える家屋敷や与力同心の役宅などが被災し、その被害は甚大なものでした。

なお、当館には、天保8年4月28日付で、大坂玉造口定番与力で砲術家の坂本鉦之助が、郷里の先輩である飯田藩（現長野県飯田市）の砲術指南役・鍋木堅蔵に大塩平八郎の乱の状況を伝えた書状の写し②が残されています。書状の原本は失われているため、貴重な資料といえます。坂本は、事件前は大塩と交流がありましたが、事件の際には大塩側の大砲手を狙撃して乱の鎮圧のきっかけを作った人物です。書状では、この事件に関しては納得がいかないと記しています。

冒頭に触れた今切湊の改修計画は、大塩の乱ののち、資金調達などの関係で頓挫し、天保12年（1841）5月には久米は亡くなってしまいました。（齊藤 祐司）



▲②「大坂騒動賊徒放火 全 玉造与力書翰」の表紙と第一丁おもて



第3展示室

婦人雑誌付録にみる女たちの戦中・戦後

今年は戦後70年の節目の年。

今回の展示では、戦中・戦後（昭和10年頃から昭和30年頃まで）の婦人雑誌付録から、窮乏、混乱、荒廃の時代を生きた女性たちの暮らしの一端を探ってみたいと思います。表紙や特徴的な記事、衣生活や食生活、子育てなどの情報、また、誌中のさまざまな広告からも、それぞれの時代と環境の下、地域や家族の中で懸命に生きようとした女性たちの姿が垣間見えてきます。

ところで、日本で初めての婦人雑誌、『女学新誌』が、明治という新しい社会にふさわしい女性を誕生させることを目的として創刊されたのは、明治17年（1884）のことでした。以後、その時々々の社会情勢や、女性の意識やあり方の変化などの影響を強く受けながら、教養誌や家庭誌など数多くの婦人雑誌が発刊されました。戦争が激しくなると言論統制も厳しくなり、婦人雑誌も戦意高揚の役割を担わされることになります。

戦時体制下では、節約、国力増強、滅私奉公などが奨励され、付録の表紙にも“和服洋服の繕ひ方長持法”“出征兵士慰問用編物”“国民精神総動員”“子供の元気国の力”などの言葉が見られます。戦後になると、一挙に欧米の文化・風俗が流れ込み、“ニューアメリカンモード”“アメリカフランスニッポン夏のスタイル全集”“最も新しいスタイル!アメリカンファッショ”などの言葉が見られ、自由を謳歌する雰囲気伝わってきます。

今回で紹介する資料は、かつて鎌田共済会図書館で閲覧、貸出し用として利用されていたものです。人びとの手に触れ、また長い年月を経たことにより、傷みや汚れ、色褪せが目立ちますが、却ってその時代の重みのようなものも感じられます。

この過酷ともいえる時代を生きた女性たちには、半生を振り返るきっかけとして、若い女性たちには、母、祖母、曾祖母の生きた時代を知ることにより、今あるあたり前の暮らしの大切さを再認識し、さらに、これからの人生をより自分らしく生きるヒントにいただければ幸いです。

（吉久 由紀子）



▲婦人倶楽部 昭和14年7月号付録



▲婦人倶楽部 昭和15年11月号付録



▲婦人倶楽部 昭和24年8月号付録

台湾サイシャット族の珠裙

山田 仁史

本年(2015)5月16日、五月晴れのすがすがしい瀬戸内の風を受けながら、坂出駅近くの鎌田共済会郷土博物館を訪れた。角南聡一郎氏の科学研究費に伴う所蔵品調査のためである。いろいろと見せていただいた台湾原住民族資料の中に、「新竹州 台湾生蕃」という札のついた「珠裙(しゅくん)」があった。

珠裙とは、シャコ貝(Tridacna)などの貝殻をビーズ状に加工したものを糸で結わえて連ね、これを無数に縫いつけて装飾としたスカートのことで、台湾ではタイヤル(アタヤル)族のものが有名である。布自体は苧麻の自然な白色が時間の経過により少し黒ずんだ、地味な風合いだが、保存状態もよく、貝殻ビーズもきちんと残っていて、なかなかの優品と思われた。

その後、館から知らせていただいたところによると、大正14年発行『郷土博物館第一回陳列目録』がこのたび館長の調査で発見され、その一覧・解説によれば、この珠裙はタイヤル族のものではなく、新竹州サイセツ族のものだったという。

これを聞いて、私の胸はさらに躍った。というのも、私は新竹縣・苗栗縣のサイシャット(サイセツ)族のもとで現地調査を行なった経験があり、以来同族の友人たちと交流を続けているからだ。

さて、珠裙についてはすでに多くの研究がある。まず「貝珠」つまり貝殻ビーズについて、考古学・民族学の立場から二人の研究者が重要な論考を出している。その第一は北京出身、台湾で学び渡米してイエール大学・ハーバード大学に務め、K・C・チャンの愛称で親しまれた張光直(Kwang-Chih Chang, 1931~2001)が、台湾大学の学生時代に書いた二つの論文[張 1953, 1958]。もう一つは、台湾考古学の先達である国分直一に学んだ木下尚子が著した「東亜貝珠考」である[木下 1999]。

さらに、台湾原住民(先住民)の衣飾文化については北投文物館長の李莎莉の著書[李 1998]、物質

文化の側面からは台湾大学教授を務めた人類学者・陳奇禄による英文著書[Chen 1968]、在野の研究者で自宅に膨大なコレクションを有していた徐瀛洲の短報があり[徐 1977]、とくにサイシャット族の物質文化については台湾大学教授・胡家瑜のモノグラフがすばらしく[胡 1996]、それぞれ珠裙ないし貝殻ビーズにもふれている。以下、主としてこれらに基づき記述したい。

貝殻ビーズ自体は、東アジア、東北アジア、東南アジア、オセアニア、アメリカ大陸と、環太平洋で広く装飾および貨幣として用いられてきた。台湾でも、南部の墾丁遺跡から紀元前2千年前後の貝珠が見つかっている。漢籍では、『書経』(尚書)禹貢に「島夷卉服、厥篚織貝」の記述がある。この八文字をどう解釈するか諸説あるが、「島夷」が台湾原住民で、「織貝」が貝珠衣のことだとすると、「台湾原住民が木綿の服を着て、籠に貝珠衣を入れて来た」と取れる。

近現代の台湾原住民では、離島のヤミ(タオ)族を除く台湾全島の諸民族において貝殻ビーズが用いられていた。そのうち、とくにタイヤル、サイシャット、パイワンの各族では20世紀前半まで、これが交易の媒介として使用されており、とりわけ発達をみたのはタイヤル族においてである。

貝殻ビーズの製作法については、貴重な記録が残っている。1803年(享和3)に台湾東海岸に漂着した松前藩の船頭文助が、秀姑巒溪河口付近のアミ族における習俗を観察・口述し、これを秦貞廉が編集した『漂流台湾チョプラン嶋之記』に、図【図1】入りでおよそ次のように描写されているのである。

商売に従事する女夷(アミ族女性)は「チャーガオ」と称するものを製造する。「コッケ」という貝をよい加減に火であぶり、一分四方ばかりに切り、轆轤錐(現地名パン)を以て、その中に穴をあけ、糸の長さ四尺ばかりのものにぎっしり通し、竹で作った弓にこれを張っ



て、砥石に当てて上から軽く押さえ、心静かに研磨すれば、自然に丸い念珠のような形の小粒貝珠ができてあがる。名づけて「チャーガオ」という。これを上流およそ5、60里にあるチョーガワ(タイヤル族木瓜群)、イワタニ(ブヌン族)と称する所で交易をする。一筋を以て、布およそ四尺に交易する。その夷(主にタイヤル族であろう)はこれで衣服の飾りにするという[秦 1810]。

このチャーガオ(アミ語cangaw)というのが貝殻ビーズである。こうして製作された貝殻ビーズ【図2・3】は、まずもって貨幣の役割を演じた。タイヤル族では、糸に通したままの珠条、約十本を束ねた珠条束、そして珠条を連続した珠裙が、主として貨幣ないし交換財となった。1915年時点で、珠裙一枚は日本円で4円から6円に相当し、また交換における比率は、休閒地一区画に対し珠裙1〜4枚、米・粟150把(1把は約5合)に対し珠裙1枚、銃一丁と珠裙2枚、大豚には珠裙2枚以上、獵犬一頭と珠裙1、2枚という具合だった。さらに結納においては男性方から女性方へ珠裙を贈ったが、場合によっては7、80枚を要することもあった。罰金や報酬としても珠裙が用いられた。いかに高価なものだったか、想像できよう。

これらの他、貝殻ビーズ付きの貴重品としては脚絆(タイヤル語kinraya)や胸当て(同toyah)、上衣つまり珠衣(同lukus kaxa')などもあった。1913年にタイヤル族のもとに滞在したドイツ人ヴィートフェルトの観察によれば、それぞれ日本円で3円、5円、10円に相当したという[ヴィートフェルト 2003: 11]。

上記のうち、ことに珠衣は、誰でも着てよいものではなかった。頭目(首長)にあたる男性や、首狩慣習を守り多くの敵首を獲った勇士などだけが、盛装として身に着けるものだった。珠裙も同じく晴れ着の役割を持っていたが、何しろ大量の貝殻ビーズを付けるので非常に重く、時に2キロ以上にも達したため、だんだんと実用品ではなく、財貨としての役割が強まっていったようである[李 1998: 369]。

さて、サイシャット族における珠裙の記述はあまり多くない。サイシャット族はタイヤル族と隣住ないし混住してきたし、通婚も多かったため、文化的に共通

点が多い。よって、両民族における貝殻ビーズおよび同製品の使用法は、ほぼ同様だったと考えられる。それでもいくつか記録をひろってみれば、以下のようなある。

サイシャット族では貝珠をシロエ(Siloe')と呼び、これ一個分を1カムズ(kamez)という単位とする。それをつないで、長さが肩から中指の先端に至るものを1カレホカン(kalihokan)と呼び、価値は10銭に相当するという。ただし、サイシャット族出身の趙山河氏によれば、カレホカンという語には銅銭の意味があり、珠串のことはおそらくアハ・ワアイ('aehae' wa:ay)と呼ぶのが正しかろうという[小島/安原 1917: 147, 中国語版: 119]。

興味深いのは、サイシャット族において長雨が続いた場合、潘姓または風姓(サイシャット族は父系氏族制)の者が山に赴き、珠裙を棄て晴天を祈って帰った、という記述である[佐山 1921: 370]。張光直によれば、これは台湾原住民において貝珠が宗教的に使用された唯一の事例であるという[張 1958: 65]。

先述した趙山河氏(サイシャット名'oemaw a 'oebay)は近年、持ち前の絵の天分と母語能力を活かし、故老への聞き書きの成果を豊富に採り入れて、サイシャット族の伝統的儀礼を絵入りでまとめた好著『賽夏族歳時祭儀教材』を出版した。それによると、天候がよく豊作になるよう祈る「祈天祭」では、今なお貝珠(Siloe')が、野桐樹の葉および粟とともに、同一の箕の上に載せられて捧げられる[趙 2013: 82]。大正期の伝統が、今も生き続けているのかもしれない。

謝辞

所蔵品調査に際しお世話になり、このような執筆の機会を与えてくださった廣瀬永津子氏および館の皆様は心よりお礼申し上げます。また筆者に調査同行を許され、貴重な文献をご教示くださった角南聡一郎氏に感謝いたします。台湾でいつも親代わりのように接してくださる趙山河氏ご夫妻、ma'alo'!(ありがとう)。

参考文献

- ・ ヴィートフェルト、オットー 2003「小特集・ヴィートフェルトの台湾原住民研究」金子えりか／山田仁史(訳・解説)山路勝彦(解説)、『台湾原住民研究』7:3-95.
- ・ 木下尚子 1999「東亜貝珠考」龍田考古会(編)『先史学・考古学論究Ⅲ 白木原和美先生古稀記念献呈論文集』:315-354. 熊本:龍田考古会.
- ・ 胡家瑜 1996『賽夏族の物質文化——傳統與變遷』台北:中國民族學會.
- ・ 小島由道／安原信三 1917『さいせつと族』(番族慣習調査報告書;第3卷)台北:臨時台湾旧慣調査会(中国語版は『賽夏族』台北:中研院民族所、1998)
- ・ 佐山融吉 1921『排灣族・獅設族』(蕃族調査報告書)台北:台湾總督府蕃族調査会.

- ・ 徐瀛洲 1977「高砂族の衣裳形式——特にタイヤル族を中心に」『服装文化』154:92-97.
- ・ 張光直 1953「本系所藏臺灣泰雅族貝珠標本」『國立臺灣大學考古人類學刊』2:29-34.
- ・ ——1958「臺灣土著貝珠文化叢及其起源與傳播」『中國民族學報』2:53-133.
- ・ 趙山河 2013『賽夏族歲時祭儀教材』苗栗縣大湖郷:雪霸國家公園.
- ・ 秦貞廉(編)1810『漂流台湾チョプラン嶋之記』(台北:國立中央圖書館臺灣分館復刻、2011)
- ・ 李莎莉 1998『台灣原住民衣飾文化——傳統・意義・圖說』台北:南天書局.
- ・ Chen, Chi-lu(陳奇祿)1968. Material Culture of the Formosan Aborigines. Taipei: The Taiwan Museum.

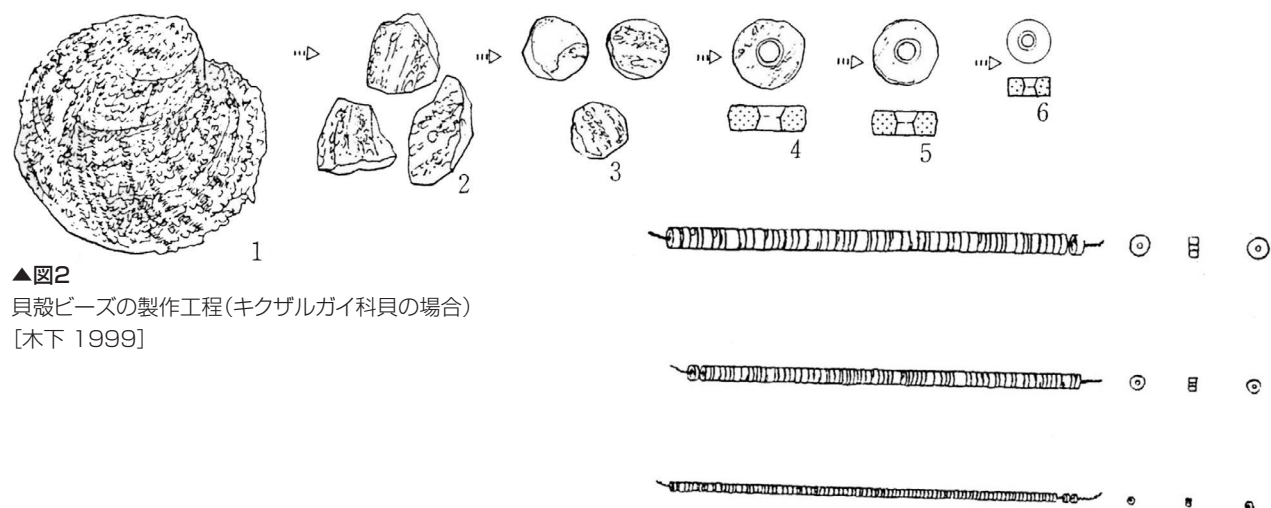
(東北大学大学院文学研究科 准教授)



▲珠裙 サイシャット族／台湾「新竹州」幅48.4 長80.1cm



▲図1
『漂流台湾チョプラン嶋之記』に描かれた、19世紀初頭アミ族における貝殻ビーズの製作風景[秦 1810]



▲図2
貝殻ビーズの製作工程(キザルガイ科貝の場合)
[木下 1999]

▲図3
台湾タイヤル族における「貝珠」(右)と「珠串」(左)[張 1953]



宮武辰夫の蒐集と台湾原住民族

角南 聡一郎

はじめに

鎌田共済会郷土博物館所蔵資料には、宮武辰夫寄贈による一群の資料36点がある(鎌田共済会郷土博物館編 1986)。これらは1936(昭和11)年に高松市の宮武辰夫より寄贈されたもので、資料のほとんどは台湾原住民族の生活用具である。近年、これらの中のヤミ族(タオ族)の土偶(土人形)の紹介がなされた(廣瀬 2013)。筆者と山田仁史はこの紹介によって資料の存在を知り、館のご厚意により熟覧をさせていただいた。宮武は画家として、また創造美育運動の実践家として活躍した。しかしながら戦前は探検家としても蒐集家としてもよく知られた存在であった。宮武の業績に対する評価は、主に戦後におこなった美術教育についての研究はあるものの、戦前の調査や蒐集品への言及はこれまで極めて少ない。そこで本稿では、宮武の台湾調査に関する記述と資料との関連を検証することを通じて、資料にとって蒐集者の情報がいかに重要であるかを考えてみたい。

宮武辰夫略歴¹⁾

宮武は1892(明治25)年に香川県高松市片原町で生まれた。父宮武権三郎、母のリキの長男である。権三郎は高松藩の御殿医であった。宮武は家業を継ぎ医者となることよりも、画家となることを志した。東京美術学校洋画科に学び、1915(大正4)年に23才で帝国美術展に出品し入選している。翌年卒業とともに函館高等女学校に就職した。ここでアイヌの民芸品と出会い、わずか2年で同校を辞して世界各国で原始民族芸術の調査(探検)に出かけた。調査と共に積極的に現地で「原始芸術」資料を蒐集したようだ(写真1)。調査記録は著作として、蒐集品は図集として出版された。戦後は創造美育協会の設立に委員として参加するなど、幼児の美術教育研究及び実践へと力を注ぐものの、1960(昭和35)年9月24日に67才で没した。

調査地と蒐集資料

宮武は戦前にブームとなった、南方通、南洋趣味と呼ばれた人々の範疇に含まれる。その臨地調査は、未開地へのエキゾチックな憧憬からおこなわれた探検といった趣であった。調査地は、アラスカ、アメリカ、フランス、台湾(パイワン族・タイヤル族・ブヌン族・ヤミ族)、インドネシア(セレベス・ボルネオ・スマトラ・バリ・小スンダ列島)、フィリピン、ニューギニア、インド、エジプト、モンゴル、中国東北地方である。

宮武は後に柳宗悦らの民芸運動と呼応する。その契機は次のようなものであった。1939(昭和14)年に東京松坂屋で開催された宮武蒐集品を主としたフィリピンの展覧会が開催された。それを見た柳は宮武とはそれまで面識はなかったが、「同氏の選択に非常な価値のあることが分つた。私はそこに三度足を運ばせた」。「率直に云うと他人の蒐集に感心した場合は非常に少ない」「私が感心した其の稀な場合の一つは宮武氏の蒐集で、私はまだ其の全部を見る折を得ないが、兎に角選び方に筋が通つてゐて、美しさの見える人でなくば当抵出来ない蒐集である」(柳 1940)、と評価している。

こうした柳との出会いがあり、後に宮武は柳が主宰する雑誌『民芸』や関西の民芸関係者が多く携わった『阪急美術』などに寄稿している。蒐集されたモノは著作の図版や図集で写真により紹介されたが、図集の装丁などは民芸運動の影響が強く認められる。宮武は大阪府箕面市の自宅に「原始芸術蒐集室」を設け、蒐集品の展示がなされていた(写真2)。その傾向は、民芸運動の用の美に相通じるもので、日用品が中心であり、一部に儀礼用具などが含まれていた²⁾。

宮武の台湾調査とその記録

宮武が台湾をはじめて訪れたのは、1918(大正7)年のことで、パイワン族、タイヤル族、ブヌン族のもとを訪れている。再度台湾を訪問したのは1936



(昭和11)年のことである。宮武自身によれば、「昭和十一年初秋日本を出て途中台湾に立寄り、シンガポールに渡つてマレー半島の風物に接し、東印度諸島への諸般の準備を整へて先づジャヴァに上陸」後、「東印度諸島」を中心に「千余枚の貴重な写真や純摯溢れた二千点にあまる芸術蒐集を果し」昭和十二年七月十二日瘦せ細つて母国の土を踏む事を得たのであつた(宮武 1937: 1)、という。台湾では蘭嶼(紅頭嶼)のヤミ族を訪問し、資料も蒐集している(宮武 1936a・1936b)。本館に寄贈されたものの多くはこの時に集められたものであると考えられる。

本館所蔵資料の写真を用いた著作がいくつかある。年代順には、『東印度諸島の怪奇と芸術』(宮武 1937)、『茶わん』8-5所収の「紅頭嶼ヤミ族の原始土器を探る」(宮武 1938a)、『世界に原始芸術を探る』4(宮武 1940d)である。宮武 1937では碗形土器の写真1枚、宮武 1938aでは碗形土器、壺形土器の写真4枚(うち1枚は宮武 1937と同じ、写真3・4)、宮武 1940dでは壺形土器、土偶の写真2枚(うち1枚は宮武 1938aと同じ)がそれぞれ用いられている。

宮武はヤミ族の土器について資料写真を提示しながら次のように紹介している(宮武 1938a)。壺には「径一尺余」の「汐汲み用」のものと「径二尺ものある」「煮もの用の大壺」があること、また「径二尺もあらうかと思われる大鉢」と「径一尺七・八寸」の「取手のついた鉢」がある。土器製作は轆轤を用いず手捻りでおこなわれ、土器製作者は男性で、土器製作は漁撈ができない秋冬の期間に行われること、原材料の粘土は山間から採取し、臼で搗碎し紐状に伸ばして輪をつくりこの輪を順次重ねて器形をつくり、左手に扁平な石を持ち壺や鉢の内側に入れ、右手に羽子板様の木板を持って、内外から叩きつつ器壁を薄くして仕上げる。文様を施すものは篋でこの上から克明に施文する。これらの土器類を数日間陰干しし、海岸に盛った薪の中に入れて焼成する。完成した土器は屋内に保管され、燻されることで飴色に光るようになる。

また玩具であり宗教的意味はないとされる土偶についても、イワリヌ社(Ivalino、現在は野銀部落と表

記)で以下のような聞き取りをしたことをあげ、元来は宗教的なものであったとの見解を述べている。

「土偶はタウタウと呼ばれ かうした土偶の生まれた起源には、必ず子供を希ひ欲した念願が祈りとなり、それが一種の呪物にまで化していつた事に因すると私は思ふ。島の東海岸イワリヌ社のとある家で、網袋に入れ吊したこの種の土偶に供物をしてあるのを見かけたが、その家の女は私の問にこれは死んだ子供へのお供へだと答へたものであつた。この一言にもこの土偶が未だに子供の影像として、又呪物としての存在の意義が潜んで居る事が頷かれる。その他のものにも或る種の念願を籠めてつくられたものがあるが、大漁や戦争の群像生殖の男女像などが確かにそれであつて、かうした群像の生れた当時には立派にこれ等のものがフェッチシュ(Fetisch)としての役割を演じたものであつたであらう」(宮武 1940c: 11-12)。

後に考古学者・民族学者の国分直一は、ヤミ族の土偶は元来宗教的意味があつたものが、ヤミ族土偶が「発見」された時には、既にその意味が失われていたとの見解を示している(国分 1981)。宮武が独自の臨地調査により、土偶が宗教的であつた根拠を示していることは非常に重要であり、先駆的であつたのだ。

おわりに

宮武辰夫の蒐集品についてはまだまだ解明するべき点が多い。蒐集品のほとんどは兵庫県神戸市の豊雲記念館に寄贈されたが、2011年3月に閉館してからはその実態に迫ることが困難な状況にある。そのような中、収集の時期や経緯がよくわかる資料が、宮武の地元である本館に収蔵されていることは意義深い。宮武の蒐集品に関する著作は、自費出版で印刷部数が限られたものもあり、広く知られているものは限定される。遺された資料と蒐集者の記録、記述とが合致するということは、モノを通じて蒐集者や研究者に迫ろうとする場合に不可欠なものである。つまり宮武がこれらの資料を、どのような理由から蒐集したかを知ることができるのである。筆者が唱える資料とフィールドノートはセット関係として捉えるべきと



の説は(角南 2010)、時間の経過とともにフィールドノートが失われ資料だけが残ることとなり、検証が困難な場合が多くなっている。そのような中、館蔵宮武資料は様々な可能性を提示してくれる一群であることが判明した。今後、広く活用されることを期待したい。

なお、本稿には2013年度～2015年度科学研究助成・基盤研究(C)「日本国内所在・台湾原住民族資料とその来歴の基礎的研究」及び2013年度～2016年度科学研究費助成・基盤研究(A)「帝国日本におけるモノと人の移動に関する人類学的研究ー台湾・朝鮮・沖縄の他者像とその現在」による成果を含んでいる。

【註】

- 1) 宮武の略歴については大谷恵子の調査研究が最も詳しく、本稿でもこれを参考とした(大谷 1990)。
- 2) 民芸運動と台湾原住民の関係については、拙稿を参照されたい(角南 2015a)。

【引用・参考文献】

- ・大谷恵子 1990「宮武辰夫その人と美術教育ー第二次世界大戦後の我が国の美術教育を中心としてー」『頌栄短期大学紀要』22 pp.71-105
- ・鎌田共済会郷土博物館編 1986『資料目録(増訂再版)』鎌田共済会郷土博物館
- ・角南聡一郎 2010「鳳鼻頭遺跡の発見と現在ー日本植民地時代台湾の考古学研究とその継承をめぐってー」『坪井清足先生卒寿記念論文集』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会 pp.290-298
- ・角南聡一郎 2013「芸術家・宮武辰夫の調査と蒐集」『日本民具学会第38回大会発表要旨集』
- ・角南聡一郎 2015a「民芸運動と台湾原住民の工芸ー学説史及び集積された資料の整理に向けてー」『人類学研究所研究論集』2 pp.69-80
- ・角南聡一郎 2015b「台湾ヤミ族の土偶ー用途と造形をめぐってー」『日本文化人類学会第49回研究大会要旨集』

- ・廣瀬永津子 2013「台湾先住民ヤミ族の土人形」『郷土博通信』2 p.12
- ・宮武辰夫
1936a「紅頭嶼写真紀行」『海』6-6 pp.5-6
- ・宮武辰夫 1936b「日本の南端紅頭嶼ヤミ族の怪奇土俗と芸術」『会館芸術』5-7 pp.1-6
- ・宮武辰夫
1937『東印度諸島の怪奇と芸術』宮武辰夫
- ・宮武辰夫 1938a「紅頭嶼ヤミ族の原始土器を探る」『茶わん』8-5 pp.111-118
- ・宮武辰夫 1938b「紅頭嶼ヤミ族の原始土器を探る【承前】」『茶わん』8-6 pp.28-33
- ・宮武辰夫 1940a「紅頭嶼(一)」『世界に原始芸術を探る』1 世界原始民芸図集刊行会 pp.12-19
- ・宮武辰夫 1940b「紅頭嶼(二)」『世界に原始芸術を探る』2 世界原始民芸図集刊行会 pp.12-19
- ・宮武辰夫 1940c「紅頭嶼(三)」『世界に原始芸術を探る』3 世界原始民芸図集刊行会 pp.10-15
- ・宮武辰夫 1940d「紅頭嶼(四)」『世界に原始芸術を探る』4 世界原始民芸図集刊行会 pp.8-13
- ・宮武辰夫 1940e「紅頭嶼(五)」『世界に原始芸術を探る』5 世界原始民芸図集刊行会 pp.22-27
- ・宮武辰夫 1940f「紅頭嶼(六)」『世界に原始芸術を探る』6 世界原始民芸図集刊行会 pp.24-27
- ・宮武辰夫 1943『フィリッピン原住民の土俗と芸術』羽田書店
- ・柳宗悦 1940「宮武君の蒐集」『世界に原始芸術を探る』3 世界原始民芸図集刊行会 p.1

【図版典拠】

写真1 宮武 1937、写真2 宮武 1943、
写真3・4 宮武 1938a

(元興寺文化財研究所人文科学研究室・総括研究員)



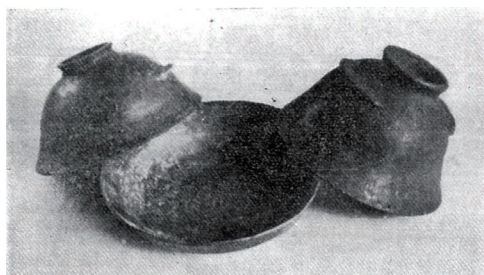
▲写真1 宮武辰夫肖像



▲写真2 宮武と原始芸術蒐集室の一部



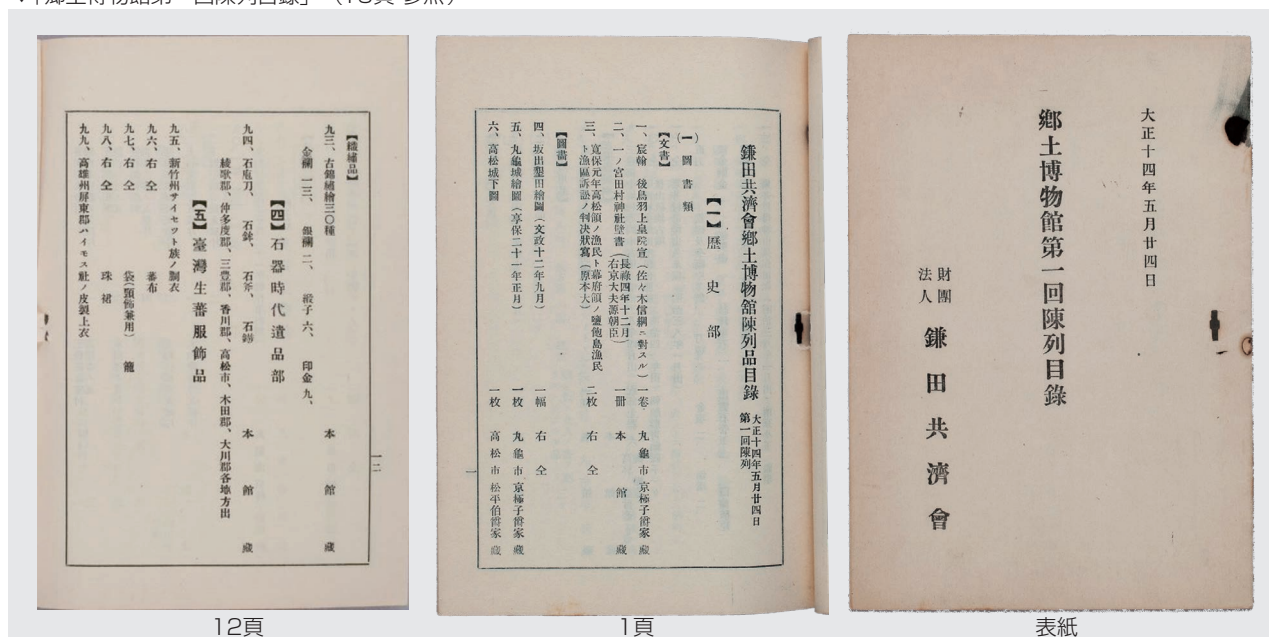
▲写真3 ヤミ族の汐汲み用壺



▲写真4 ヤミ族の取手付鉢

郷土博物館のあゆみ (5) 博物館の開館 参考図版

▼「郷土博物館第一回陳列目録」(13頁 参照)



12頁

1頁

表紙



郷土博物館のあゆみ (5) 博物館の開館

博物館の目指すもの

大正13年(1924)3月から郷土博物館(旧郷土博物館 - 平成4年撤去)建設工事が本格化するとともに、併行して博物館のあり方や展示方針が検討される。その中で最も重要なことは調査部事業と博物館の活動内容を結びつけるとしたことである。調査部の調査と博物館の展示はそもそも表裏一体とも言え、また調査部主事岡田唯吉おかただきちを中心にして両事業が進められている状況からすれば当然とも言えるが、以後それが明確な方針となり、運営、人事等についても博物館は調査部と不可分の組織となる。

一方、博物館は図書館(現郷土博物館)の参考室とするとしており、注目される。博物館の実物資料は読書の参考にしうということであろう。共済会にあっては図書館が規模の上でも活動の上でも中心的存在であったが、博物館がそれを補助する役割としても見られていたことになる。

次に、博物館では「本県内各地に散在する史料・参考物を一個所に取りまとめ、専門家・一般人の研究・調査に資すること」「副本・模写物を備えること」とされ、「史料」重視の岡田の姿勢が明らかになり始めるとともに、これが博物館の展示方法や資料収集に反映されて行くことになる。

まず県内に散在する史料・参考物を一個所に取りまとめるため、多くの資料を所蔵者から借用し展示するという方法が打ち出される。もちろん館蔵品の収集・購入も行われ、併せて展示されたが、年々借用物の割合は増え、郷土博物館の特質となる。ただし、この方式は突然始まったものではない。そのきっかけとなったのは、大正11年11月の皇太子、翌12年5月の久邇宮家一行の共済会訪問の際の展示である。そこでは鎌田勝太郎保管の久米通賢資料等とともに諸方面から優品の提供を受け陳列がなされた。むしろ皇族の台覧に供することは所蔵者にとって「栄誉」であり、こぞって貴重な品が提供されたのである。

このことが共済会の展示場所としての認知・信頼を得ることにつながり、その後に続く大正12年の皇太子行啓記念展、同13年の久邇宮家来訪記念展でも借用展示が容易に実現することになる。これらは短期間の

展示であったが、その後に新設された博物館でも既に展示場所としての認知を得ていたことで展示品の借用がスムーズに行えることになったのである。それはまた県下各地の新資料をできるだけ多く発掘したいという岡田唯吉の意図とも合致していたのは言うまでもない。

また、これらの展示資料を研究・調査に資するためには、ある程度の長期展示が必要なことから、展示期間を一年間とすることになった。

副本・模写物については、借用品の中から可能なものについて謄写、撮影、模写をすることとした。

開館までの動き

郷土博物館の竣工は大正13年10月末で、図書館の南側に向かい合う二階建、建坪90m²ほどの比較的小さな建物であった。だが翌年5月24日の開館まで時間を要した。その理由としては、博物館が皇太子成婚記念事業として急遽建設が決まったため、博物館運営方針の策定の他、展示計画を作り、展示品を確定し、それを収集、借用して展示することに時間がかかったことがある。また建物が完成しても博物館は陳列棚等の内部設備の造作も必要であった。

その他に、共済会では博物館開館より先にいくつかの展覧会が行われたことも影響していたとみられる。前述のように大正12年11月に皇太子行啓記念第1回史料展覧会が、大正13年5月には久邇宮家来訪記念第1回花の展覧会が行われた。大正13年11月には行啓記念史料展の第2回展が行われている。いずれも展示場所は図書館2階の講堂と談話室である。これらの展覧会は図書館主催ではあるが、特に史料展では「史料」に精通している岡田唯吉によって実質的に計画・実施されたため、それらに時間を割かざるを得なかったとみられる。

そのような中でも博物館の運営方針の策定と併せて陳列資料の分野やその収集にも検討が加えられていった。陳列に用いる資料については、社寺、役所、学校、文庫、名家の所蔵する文書、記録、国宝建造物等の写真、絵図、各地散在の文書、考古遺物、史籍、偉人・名士の肖像画・写真・伝記・記念物、金石文、史

蹟・名勝の写真・地図などを挙げ、機会を逸しないように速やかに収集することとしている。また久米通賢資料も大正13年5月の久米の贈位奉告祭を期してさらに収集を図るとしている。

一方、博物館内については、大正13年9月頃から陳列棚の設置工事が始まり、年末まで続く。9月下旬頃には博物館規程が起草される。これは観覧規程と出品規程があり、観覧規程は、第1条に、観覧を希望する者は住所氏名を申し出、承認を受けること、第5条に、陳列品の特別研究を希望する場合は帳簿に研究の目的・方法等を記入し許可を受けることとしている。出品規程は出品希望者に対するもので、第1条に、あらかじめ品名・形状・性質・伝来を申し出ることとし、第4条で出品物について博物館が模写・模造・撮影して参考に供し、また公益のため発行することありとする。第5条では預かり期間を1年としている。

11月には次年度の郷土博物館費が計上された(当時の共済会は暦年会計年度制)。内容は陳列物購入費、備品費、印刷費(博物館観覧規程、出品規程、出品依頼状、出品申込書等)、開館式費、雑費である。

大正14年に入ると展示内容の検討が始まり、2月16日に岡田は博物館陳列案を提出。そこでは1 久米栄左衛門遺品部、2 歴史部、3 美術部、4 美術工芸部、5 天然物標本、6 奈良正倉院御物写、7 珍書籍類の7分野を掲げている。2は文書、金石文、考古遺物、貨幣など、3は絵画、書蹟、4は焼物、漆器、摺物、5はサヌカイト等、7は儒者・文人自筆本等である。どのようなものを展示の対象としていたか知られるが、しかしこれはまだ大枠を示したもので、実際の展示のための撰択が続けられる。3月に入ると岡田は各地に展示品候補の出品依頼と調査に出かける。

5月1日に岡田は博物館主事を兼務することになり、博物館事務が始動。以後岡田たちは出品物の借入に県内を東奔西走し、展示にも忙殺される。

5月24日(日)の開館当日は、開館式後、招待者の内覧を午前10時から午後4時まで行った。一般の観覧は当面毎週土曜日午前11時(その後10時に変更)から午後4時までとされたので、30日(土)から一般人への開館となった。

展示内容は『郷土博物館第一回陳列目録』によると1 歴史部、2 美術部、3 美術工芸部、4 石器時代遺品部、5 台湾生蕃服飾品に大別されている。歴史部は1 図書類(文書・図画・金石文)、2 古代遺品類(発掘遺

物)、3 祭祀宗教二関スル物品(国宝建造物写真等)、4 讃岐人物(久米栄左衛門部)。美術部は建築(古瓦・雛形)。美術工芸部は漆芸品、染織品。石器時代遺品部は石庖刀・石鏃等。台湾生蕃服飾品は珠裙等(本誌2頁、5頁参照)で、総計101点であり、うち48点は久米通賢資料である。

博物館の運営体制

郷土博物館は調査部と業務が密接であるところから、岡田は調査部主事のまま博物館主事も兼務する。岡田以外に図書館と兼務の調査部書記1人がいるが、その書記もやはり博物館業務を兼務した。主事ポストがあることは博物館が共済会施設の一つということを示すが、専任職員は置かれなかった。

次に、郷土博物館の開館日は週に一日、土曜日の午前10時から午後4時だけであった(ただし特志者は開館日以外でも観覧可能)。図書館が月曜日以外の午前8時から午後9時まで開館(9月から4月までは午前9時開館、8月のみ午後4時閉館)していたことは大きな違いである。調査部もやがて職員が増え、昭和9年8月からは土・日の2日間開館になるが、それでも少ないことに変わりはない。

調査部・博物館の職員配置や開館日数の少ないことの根本は、やはり共済会内において主要施設の図書館との対応の違いによるのであろう。

博物館は短期間の特別展を行うことが稀にあるが、基本的には1年間継続の展示のみを行っていた。岡田たちは通常は図書館2階の調査部で勤務し、博物館開館日には誰か1人が博物館に出向き観覧者への対応と巡視を行う。調査部から人が出せない場合は図書館職員が行くこともある。開館当初は博物館1階に事務室があったが、やがてそこにも陳列棚が置かれるようになり、昭和8年の改築後はその事務室も無くなる。

以上のような状況の帰するところ、岡田が調査部・博物館を共に管理下に置くことになり、結果として郷土資料の調査、収集、展示、模写、謄写、撮影、保存、蓄積を一体的に行える体制が図らずも現出することになる。岡田はその先に「史料」を集大成すること(讃岐群書類従、讃岐叢書など)を見据えていたようである。

(学芸・あゆみ班)



鎌田共済会の出版活動

第5回公開講座から

16頁と17頁の表は、鎌田共済会が大正7年(1918)の設立以来、現在まで出版した定期刊行物と単行書籍の現段階で知られる全てを示したものである。共済会は昭和20年(1945)を境に戦前27年、戦後70年を経ているが、戦前の出版活動が活発であったのに対し、戦後は図書館の閉鎖、郷土博物館の長期閉館など、共済会の環境が大きく変わったため低調になる。以下、定期刊行物と単行書籍に分けて若干の説明を加える。

定期刊行物

これまでA『鎌田共済会雑誌』、B『郷土博物館陳列品解説』、C『郷土文化』を発刊してきたが、現在は平成25年以来『郷土博通信』を年に2回発行している。

Aは共済会創立7年目の大正13年9月から機関誌として発刊し、「各部事業報告、研究論考、社会有益の記事、識者の寄稿、講演の筆録、仏教講話」等々を載せることを目的とした。33号(昭和5年1月)までは四六倍版(B5判よりやや大)、各号7頁～18頁、ほぼ1、3、5、7、9、11月の隔月刊。昭和5年3月の第34号(第7巻第2号)から菊版(A5判に近い)に改め、30頁～80頁前後となる。昭和5年11月号から3ヶ月ごとの発行、昭和16年6月号から4ヶ月ごとの発行、やがて用紙の割り当てが減ると、昭和18年5月と8月の2回発行、昭和19年3月の1回発行後、廃刊した。編集・発行人は1号から昭和12年6月刊の14巻2号まで理事・図書館長事務取扱の中尾飛佐太、その後は最終号まで社会教育館主事梶野忠太郎であった。発行部数は2000部台であるが、戦前の共済会の活動を知るための重要な出版物である。

Bは毎年の展示(陳列)品中の主要な展示物の写真と解説である。郷土博物館では大正14年の開館以来、主として県内所蔵家からの出品物と館蔵品とを併せて展示を行った。展示は1年間継続したので、展示替えは年に一回であった。昭和18年まで計19回の展示を行ったが、第1回と第2回は写真帖のみの発行であり、第3回からBが発行された。戦争の激化と

ともに17回以降については発行されなかったもので、発行分は全部で14冊である。発行部数の判明するものは備考1に記載した。判型は菊判で、編集・執筆は調査部・博物館主事の岡田唯吉である。表左端の展示回数次の「目録」とは「陳列目録」のことで、展示観覧者に配布されるものであった(11頁下段写真参照)。毎回作成されたはずだが、空欄は実物未確認である。形態は四六判(B6判に近い)の「冊子」と「折装」の2種あり、後者はB3判程度かそれを半切した程度の大きさの紙を折りたたんだものである。この陳列品目録は第9回からBの末尾にも附録として収載されるようになるが、第12回は凡例に目録を附録としたとあるが、手違いなのか載っていない。

Bは現在の博物館・美術館等で企画展等の開始時に発行されるいわゆる展覧会図録とは異なり、展示記録の意味を持つもので、翌年の展示の終了時点までに刊行され、出品物返却時に出品者にまず贈呈された。しかし第10回頃から次第に発行が遅れるようになり、2年後の発刊になっていく。本書は当時の展示の詳細が知られ、また今では所在の不明な品目もあるので極めて貴重な資料である。なお、本書は原則的には毎年の陳列に伴い発行されるので一応定期刊行物に入れたが、毎回内務省に出版届けを出しているため、共済会としては単行書籍として刊行していたことになる。

Cは戦後の郷土博物館再開にほぼ相応する時期の発行で、共済会設立者鎌田勝太郎十三回忌の昭和29年3月23日に創刊、以後6月、9月、12月の各23日の年4回発行を基本とした。しかしほとんどの場合発行は遅れたが、発行日付は上記の月日を常に記載した。そのため実際の発行日と半年もずれることも起きた。また昭和34年からは年1回の発行となる。「発刊の辞」によればAの後継誌という位置づけであったが、判型が四六倍版で、毎号10～12頁立てである点はA創刊時と似るが、細字4段組で1頁右上に「郷土文化」の題字があるのは新聞体的体裁である。内容的には機関誌的性格が薄れ、郷土史家や研究家の寄

稿による研究発表の場となっていた。その上、「特殊号」という変則的な号が加わることになる。これは判型が四六判の冊子で、内容も1テーマによる特集号または個人の著作であった。これらは11、12、14、18、19、21、24、26、27号で、計9点あるが、発行時期も不定で、いわば号数は付くものの単行書籍的性格であり、再版もされた。よってこの「特殊号」は16頁の「定期刊行物」表には入れず、17頁の「鎌田共済会刊行書籍」表に掲載した。Cは第27号まで続くが、そのうち「特殊号」は9点あるので、これらを除くとCの新聞体裁のものは全18点だけであり、この体裁の最終号は昭和38年9月の25号である。なお発行部数は判然としないが、17号や23号は1000部とみられる。発行責任者(編集担当者)は虫本亮一、香川邦夫、西山光衛の郷土博物館の代々主事(館長)が受け継いだ。

単行書籍

単行書はたびたび再版増刷されるものが多かったが、表には内容の修正、増補等がなされた場合に限りて掲載した。「出版年月日」欄に「初版」とあるものは、以後に「二版」「三版」等の増刷がなされたものである。30と31の間の横線は戦前と戦後の区分を示す。戦後の出版物名称に(「郷土文化」11)のようにあるのは定期刊行物Cの「特殊号」としての号数である。

すでに当館に実物が存在しない書籍もあるが、どのような書籍が刊行されたかは、『鎌田共済会雑誌』等に掲載の刊行書目や内務省に提出の出版届けの控えにより判明するものもある。これら以外に謄写版印刷によるものや活版印刷の陳列目録、パンフレットなど多数あるが、表にそれらは含めていない。

共済会に出版担当部署は置かれず、著者または各部署の責任者が随時その役を担った。

これらの刊行物は定期刊行物も含め、特に戦前期においては全て非売品で、しかるべき関係機関・個人に贈呈された。

発行部数は一様ではないが、おおよそ1000部程度で、内容により4000部などというものもある。

以下に刊行物の特徴のいくつかについて触れる。内容としては郷土史、郷土人物、史跡案内、資料目録、資料解説、講演筆記等が多いが、異質なものもある。1は大正11年に皇太子が、翌12年には後に皇太子

妃になる久邇宮良子女王が共済会図書館を訪れたことを無上の光栄として、鎌田勝太郎が各界知名の士に呼びかけて編んだ記念歌集である。26は昭和17年3月に他界した鎌田勝太郎の葬儀記録である。

7、23、29、30は現在、当館に実物が存在しない。7は香川県立図書館、30は国立国会図書館に架蔵されているが、23、29は今のところ探しあぐねている。23の頁数は発注の見積もり書で判明した。29は国会図書館に同題名・著者で内容も同じと見られる昭和17年刊の書籍があるが、出版者は「大日本雄弁会講談社」「大日本報徳社」となっている。

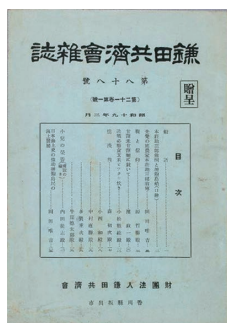
20、23、29などは時局を反映した出版物であり、特に23は「県内軍人遺家族へ贈呈」された。

昭和19年の刊行書目録(『鎌田共済会雑誌』88号)によると郷土史籍史料、鎌田共済会叢書、目録、解説、講演筆記に分類しているが、これは出版物が増加した後になされた分類で、最初からこのような出版方針があったわけではない。「郷土史籍史料」は2、3、4、5、6、9、10、26で殆どが岡田唯吉著である。「鎌田共済会叢書」は昭和15年に皇紀2600年記念事業として始まったもので、21、23、25、27である。「目録」は12、14、15、16、17、22、24で書名に「目録」が付く。「解説」は「定期刊行物」表に掲載の「陳列品写真帖」「陳列品解説」と28である。「講演筆記」は19、20、29で、共済会主催の講演内容を『共済会雑誌』に掲載し、さらにそれを元に一書にしたものである。この他に11も講演筆記を再録している。

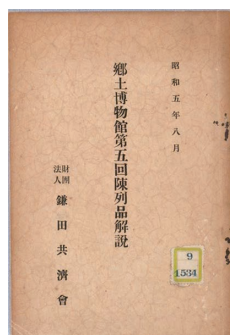
また多数の執筆をしている岡田唯吉は、2、3、4、5、13、21、27など『共済会雑誌』に連載したものを単行書籍にしていることが多い。著者が既に他で刊行したものを共済会出版物として再刊行している場合もある。27は岡田が大正15年3月に鼓岡文庫から発行したものを再発行したもので、ほぼ同一内容である。37は福家惣衛が文化同好会から昭和24年2月に刊行した同名書を大幅に修正し刊行した。43は大正10年6月に『聖跡案内』と題して崇徳天皇聖跡敬仰会から初版が刊行されたものを、文章を平易にするなど修正して刊行した。

なお上記の書籍は国立国会図書館近代デジタルライブラリーで閲覧可能なものがあることを附記する。

(加藤 優)



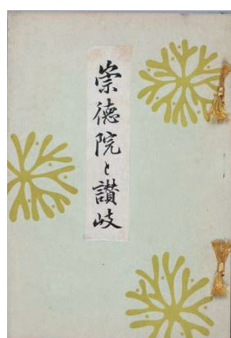
▲A 鎌田共済会雑誌 88号



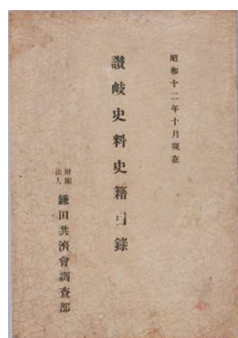
▲B 郷土博物館第五回陳列品解説



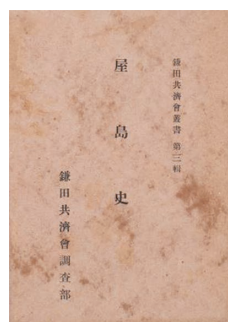
▲C 郷土文化 23号



▲3 崇徳院と讃岐



▲12 讃岐史料史籍目録



▲25 屋島史

▲36 細川清氏と
細川頼之

鎌田共済会定期刊行物

A 『鎌田共済会雑誌』

第1号 大正13年(1924)9月25日～

第21巻第1号 昭和19年(1944)3月15日、全88号

B 『郷土博物館陳列品解説』

第3回 昭和2(1927)年7月～第16回 昭和15年(1940)11月、全14冊

回数	目録	陳列開始	書名	表紙日付	発行日	頁数	備考1	備考2
1	冊子	大正 14.5.24	博物館陳列品写真帖 第一輯(歴史部)	—	大正 15.6 頃か	14丁	縦21×横19cm	—
2	冊子	大正 15.6.26	博物館陳列品写真帖 第二輯(歴史部)	—	昭和 2.5	14丁	縦21×横19cm	—
3	折装	昭和 2.7	郷土博物館第三回陳列品解説	昭和 3.5	昭和 3.6.8	63	300部	目録附録なし
4	折装	昭和 3.7.2 1	郷土博物館第四回陳列品解説	昭和 4.7	昭和 4.7.30	58	—	目録附録なし
5	折装	昭和 4.9	郷土博物館第五回陳列品解説	昭和 5.8	昭和 5.8.25	62	—	目録附録なし
6	折装	昭和 5.9.20	郷土博物館第六回陳列品解説	昭和 6.8	昭和 6.8.30	53	—	目録附録なし
7	—	昭和 6.6.6	郷土博物館第七回陳列品解説	昭和 7.8	昭和 7.8.30	58	—	目録附録なし
8	—	昭和 7.6.11	郷土博物館第八回陳列品解説	昭和 8.11	昭和 8.11.25	120	—	目録附録なし
9	—	昭和 8.11	郷土博物館第九回陳列品解説	昭和 9.12	昭和 9.12.15	86	—	目録附録あり
10	—	昭和 9.12	郷土博物館第十回陳列品解説	昭和 11.4	昭和 11.4.1	93	—	目録附録あり
11	冊子	昭和 10.12	郷土博物館第十一回陳列品解説	昭和 12.4	昭和 12.4.30	55	450部	目録附録あり
12	冊子	昭和 11.12	郷土博物館第十二回陳列品解説	昭和 13.3	昭和 13.3.10	57	—	目録附録なし
13	冊子	昭和 12.12	郷土博物館第十三回陳列品解説	昭和 14.9	昭和 14.10.25	62	—	目録附録あり
14	—	昭和 13.11	郷土博物館第十四回陳列品解説	昭和 15.1	昭和 15.3.10	59	400部	目録附録あり
15	冊子	昭和 14.12	郷土博物館第十五回陳列記念 讃岐産業二千六百年史年表	昭和 17.4	昭和 17.5.10	56	400部	目録附録あり
16	冊子	昭和 15.11	郷土博物館第十六回陳列品解説	昭和 17.5	昭和 17.12.10	55	300部	目録附録あり
17	冊子	昭和 16.12	(刊行せず)	—	—	—	—	—
18	折装	昭和 17.11	(刊行せず)	—	—	—	—	—
19	折装	昭和 18.11.23	(刊行せず)	—	—	—	—	—

C 『郷土文化』

第1号 昭和29年(1954)3月28日～第27号 昭和53年(1978)9月5日、全27号



鎌田共済会刊行書籍

	書名	編・著者	出版者	出版年月日(和暦)	頁数	縦cm
1	菊花余芳	中尾飛佐太編	鎌田共済会図書館	1923.9.5(大正12)	58丁	24
2	讃岐偉人 久米栄左衛門翁	岡田唯吉	鎌田共済会	1928.4.5(昭和3)初版	49	23
3	崇徳院と讃岐	岡田唯吉	鎌田共済会	1932.11.10(昭和7)初版	87	22
4	昭和八年九月 讃岐史籍年表及解題 鎌田共済会	岡田唯吉	鎌田共済会	1933.9.25(昭和8)	49	19
5	讃岐偉人 平賀源内翁	岡田唯吉	鎌田共済会	1934.2.5(昭和9)初版	92	21
6	旧高松藩主松平頼恕公小伝 鎌田共済会郷土博物館	岡田唯吉	鎌田共済会	1936.5.23(昭和11)	14	19
7	讃岐薬用植物：実験の療法	浦上仁一	鎌田共済会	1936.6.20(昭和11)	139	19
8	文化文政頃高松藩に於ける久米栄左衛門建築の経済政策	岡田唯吉	鎌田共済会	1936.6(昭和11)	12	22
9	讃岐偉人 村岡箒子刀自	岡田唯吉	鎌田共済会	1936.8.30(昭和11)	39	22
10	讃岐名和氏 小橋安蔵一門勤王史 鎌田共済会調査部	岡田唯吉	鎌田共済会	1936.10.25(昭和11)	73	22
11	鎌田共済会図書館陶分館開館に際して	中尾飛佐太	鎌田共済会	1937.7.25(昭和12)	30	22
12	昭和十二年十月 讃岐史料史籍目録 鎌田共済会調査部	岡田唯吉編	鎌田共済会	1937.12.31(昭和12)	134	22
13	昭和十二年 讃岐金石史 鎌田共済会調査部	岡田唯吉	鎌田共済会	1938.2.18(昭和13)	53	22
14	讃岐及日本絵図類目録 讃岐其他彫刻・漆器・陶器類等目録 鎌田共済会調査部	岡田唯吉	鎌田共済会	1938.8.27(昭和13)	50	22
15	讃岐史料、史蹟、名勝、天然記念物、等 写真目録 鎌田共済会調査部	岡田唯吉	鎌田共済会	1938.8.30(昭和13)	43	22
16	昭和十三年七月現在 考古学参考品陳列目録 鎌田共済会博物館	岡田唯吉	鎌田共済会	1938.8.31(昭和13)	24	22
17	昭和十四年五月 郷土資料目録 鎌田共済会図書館	野田宮逸編	鎌田共済会	1939.5.30(昭和14)	62	22
18	讃岐偉人 久米栄左衛門翁	岡田唯吉	鎌田共済会	1939.11.1(昭和14)増補修正再版	66	22
19	健康の科学と普勧坐禅儀	西 勝造	鎌田共済会・梶野忠太郎	1940.4.10(昭和15)	37	22
20	子供を丈夫に育てる秘訣	広瀬 興	鎌田共済会・梶野忠太郎	1940.4.30(昭和15)	11	22
21	讃岐製糖史 鎌田共済会叢書第1輯	岡田唯吉	鎌田共済会	1940.8.10(昭和15)初版	27	22
22	昭和十四年度増加図書目録	野田宮逸編	鎌田共済会(図書館)	1940.9.30(昭和15)	154	19
23	武門規範婦人篇 鎌田共済会叢書第2輯	渡辺 豊	鎌田共済会・梶野忠太郎	1940.11(昭和15)	16	—
24	昭和十五年度増加図書目録	野田宮逸編	鎌田共済会(図書館)	1941.10.25(昭和16)	153	18
25	屋島史 鎌田共済会叢書第3輯	岡田唯吉	鎌田共済会	1941.12.15(昭和16)	60	21
26	淡翁	島田恭平編	鎌田共済会	1942.5.31(昭和17)	97	23
27	讃岐国府遺蹟考 鎌田共済会叢書第4輯	岡田唯吉	鎌田共済会	1942.11.5(昭和17)初版	27	21
28	財団法人鎌田共済会要覧 昭和16年10月現在	福家惣衛編	鎌田共済会	1942.2.10(昭和17)	48	19
29	丸山方作氏述 生理応用甘藷栽培法	丸山方作	鎌田共済会	1942(昭和17)	—	—
30	昭和十六年度増加図書目録	野田宮逸編	鎌田共済会(図書館)	1943.10.15(昭和18)	147	19
31	古文書の栞(「郷土文化」11)	猪熊信男	鎌田共済会	1956.9.28(昭和31)	48	18
32	報徳論語(「郷土文化」12)	香川邦夫編	鎌田共済会	1956.12.28(昭和31)	48	18
33	香川不抱歌集 第一集(「郷土文化」14)	西山光衛編	鎌田共済会	1957.6.28(昭和32)	51	18
34	慈濟廿五年 保護の真相(「郷土文化」18)	本良英竜	鎌田共済会	1958.6.28(昭和33)	63	18
35	香川不抱歌集 第二集(「郷土文化」19)	西山光衛編	鎌田共済会	1958.9.28(昭和33)初版	47	18
36	細川清氏と細川頼之(「郷土文化」21)	猪熊信男	鎌田共済会	1959.3.28(昭和34)初版	66	18
37	城山の観光と史跡(「郷土文化」24)	福家惣衛	鎌田共済会	1962.7.28(昭和37)初版	50	18
38	讃岐偉人 久米栄左衛門翁	岡田唯吉・西山光衛	鎌田共済会	1964.6.28(昭和39)増補修正3版	56	19
39	堀田先生を憶う	亀井宅平	鎌田共済会郷土博物館	1965.12.31(昭和40)	20	18
40	讃岐に於ける菅公(「郷土文化」26)	鎌田 栄	鎌田共済会	1967.3.28(昭和42)	54	18
41	明治百年記念香川県人書画展写真帖	—	鎌田共済会郷土博物館	1968(昭和43)	23	21
42	資料目録(初版)	—	鎌田共済会郷土博物館	1971.9.1(昭和46)初版	152	26
43	崇徳上皇御遺跡案内(「郷土文化」27)	鎌田共済会郷土博物館	鎌田共済会郷土博物館	1978.9.5(昭和53)初版	115	18
44	資料目録(統編)(収蔵資料目録二)	—	鎌田共済会郷土博物館	1983.8.1(昭和58)	107	25
45	資料目録(増訂再版)	—	鎌田共済会郷土博物館	1986.1.21(昭和61)増訂再版	152	26
46	讃岐偉人 久米栄左衛門翁	岡田唯吉・山地正夫	鎌田共済会・西山光衛	1988.9.27(昭和63)増補修正4版1刷	82	19
47	香川不抱歌集 第一集・第二集合冊	西山光衛	鎌田共済会	1991.10.31(平成3)合冊初版	110	18
48	図書資料目録	鎌田共済会郷土博物館	鎌田共済会郷土博物館	2002.7.1(平成14)	488	25
49	保元伝承撰歌集 西行法師のみち歌碑群とその解題	磯野 実編著	鎌田共済会郷土博物館	2005.6(平成17)	135	21
50	香川不抱歌集 第一集・第二集合冊	西山光衛	鎌田共済会	2007.3.20(平成19)合冊増補再版	126	18
51	もっと知りたい!久米通賢	久米通賢研究会	鎌田共済会	2010.12.1(平成22)	128	22
52	讃岐偉人 久米栄左衛門翁	岡田唯吉 西山光衛 山地正夫	鎌田共済会	2013.8.31(平成25) 増補修正4版2刷	82	19

張り子の虎絵付け体験講座を終えて

香川県伝統工芸士
田井 艶子



張り子の虎は中国の虎王崇拝によるもので、古くより端午の節句に鎧や兜と一緒に子供の健やかな成長を願い飾られてきました。

張り子とは、木型に和紙を貼り重ねて乾燥させた後、和紙を小刀で切って木型を取り出して成型したもので、この技術は中国で2世紀に始まり、日本には室町時代頃に伝わってきたとされています。

当時の和紙の需要は公家・僧侶・武家等の身分の高い人たちに限られていましたが、江戸時代後期になると各地で和紙作りが盛んになり、庶民の間にも和紙の需要が高まり、反古紙も市中に多く出まわるようになりました。

江戸後期に大阪で始まったとされる張り子の虎は、当時大阪との交易と文化の交流が盛んであった仁尾港(現香川県三豊市仁尾町)を經由して伝わり、特に仁尾・三野地域で盛んに作られるようになりました。

張り子の虎は、成型したものに「胡粉」と「にかわ(昔から伝わる接着剤)」を混ぜて全体に塗り、彩色をし、模様を付け、ひげ・目を付けて仕上げていますが、その作り方は江戸時代から伝承されてきたものです。

8月1日、鎌田共済会主催の張り子の虎絵付け体験講座が開催され、講師として招かれましたが、3歳の子供さんから大人まで大勢の方々が参加され、皆様は個性豊かな絵付けを楽しみながら製作されていました。

指導しました私達も、心豊かな楽しい時間を過ごさせていただきましたことを感謝申し上げます。

▶体験講座風景

INFORMATION

■ 鎌田共済会郷土博物館第6回公開講座

「近代天文学のはじまりと大阪」

平成27年10月24日(土) 13:30~15:00(開場13:00)

会場：鎌田共済会郷土博物館2階講堂

講師：嘉数 次人(かず つぐと 大阪市立科学館)

● 参加無料 締切10月17日 先着40名

電話・FAXかHPのフォームからお申込み下さい。

電話：0877-46-2275

FAX：0877-45-0035

H P：http://www.kamahaku.jp/

鎌田共済会郷土博物館



Access

高松から…快速マリンライナーで約15分
岡山から…快速マリンライナーで約40分
JR予讃線坂出駅から徒歩5分
※駐車場あり

開館時間：午前9時30分～午後4時30分(入館は4時まで)

休館日：月曜日／祝祭日

夏季特別(8月13日～15日)

年末年始(12月29日～1月4日)

入館料：無料

